

二〇二二年度 一般入学試験 問題（国語）

次の文章は、小長谷正明氏の『医学探偵の歴史事件簿 ファイル2』という著書の一節である。よく読んで、後の設問に答えなさい。

マイケル・ドネリー空軍少佐は、ハンサムで足が長くて逞しいジェット・パイロットであった。一九九一年の湾岸戦争では第一〇戦術戦闘機隊に属し、F16ファルコンで三六日間に四四回もイラクに出撃し、数々の勲功章を受けた、エリート・ファイターである。戦後、テキサス州の訓練飛行隊の教官になり、さらに上級将校への道が開けようとしていた。

一九九六年二月、三六歳の彼はジェット機にa トウジョウしようとして、右足の力が抜けて仰向けにはしごから落ちてしまった。幸い、背中のパラシュートの包みがクッションとなって大怪我は免れた。それを見ていた同僚が笑ったので、彼も笑い返した。だが、笑い事ではなかった。

しばらく前から、ちよつとした脱力や筋肉の異常な収縮に気がついてはいた。そして、次の訓練が最後の飛行となった。軍医の診断は、筋萎縮性側索硬化症（ALS）であった。脊髄の神経細胞が冒されて、進行性に筋肉が萎縮する神経疾患で、歩けなくなるだけではなく、最後には呼吸筋の障害で亡くなってしまう。難病中の難病である。

湾岸戦争は、前年のイラクのクウェート侵略に始まり、日本人を含む外国人を「人間の盾」と称して人質にしたならず者サダム・フセインとイラクに対して、世界中の国が怒りをぶつけ、アメリカ軍がミサイルや飛行機での空襲でi を切った。リアルタイムで戦況がテレビで実況中継され、バグダードの夜空を飛ぶb ジュンコウミサイルや対空砲火の様子が映し出された。短期間で平和が回復され、このときはii 化しなかった。

戦争終結後しばらくして、湾岸戦争症候群がiii ようになった。従軍した兵士が罹る、物忘れなどの認知機能障害、不眠、手足に力が入らない、筋肉痛、運動のあとの疲れやすさ、しびれ、排便や排尿異常などの括約筋の障害、性功能異常などの症状である。また、悪性腫瘍にかかる人もいた。当初、ペンタゴン（アメリカ国防総省）はそのような症候群はないと否定的であったが、少なからぬ人が異常を訴え、ことの性質上、純医学的問題を越えて政治的議論に発展していった。

ドネリー空軍少佐は、ALSの診断を下した軍医から、戦争には関係ないとiv 言われ、ひどく落ち込んでいたが、湾岸戦争の従軍者に一〇万人もの健康障害者がいるのを知り、孤独ではないと、ペンタゴンや政府と対立しながらも訴えはじめた。一九九七年一月にはワシントンの国会議事堂に車いすで行き、証言している。そして、テレビや新聞などを通じて、不自由な体とかされる声で世論を喚起した。当局もv を上げ、科学的な追究が始まった。

過酷な戦争体験による心的外傷後ストレス障害（PTSD）や劣化ウラン弾による放射

線障害は当然あったが、さらに、兵士たちが投与された薬剤やワクチン、あるいは殺虫剤などの化学物質の**c** バクロ、中東の地中の細菌が作る毒性の物質などが問題になった。接種されたワクチンはポリオ、B型肝炎、馬痘、黄熱病とコレラに対してであり、サリンなどの神経性毒ガスへの予防薬やボツリヌス抗毒素なども投与された。また、殺虫剤入りのカラーも支給されていた。つまり、兵士たちはペットのノミ取り首輪のようなものをつけていたのだ。

サリンもボツリヌス毒素も殺虫剤も、強弱や機序の違いはあるが、いずれも神経の指令を筋肉に伝える神経伝達物質アセチルコリンに作用し、筋肉がまひしたり、あるいは強く収縮して痙攣したりして、命を奪うことになる。これに対する薬だから、神経や筋肉の細胞に影響を与えたのだろう。マウスの実験では、**d** マッシュヨウ神経が損傷されたという。しびれや脱力、疲れやすさなどの症状はこれで説明がつくのかもしれない。このような湾岸戦争症候群は、アセチルコリンを分解するある種の酵素の働きが生まれながらに低い人に発症したらしい。

ALSについての驚くべき数字が、議会でのドネリー証言の六年後の二〇〇三年に報告された。七〇万人弱の従軍アメリカ兵士の中で、一〇年間に四〇人のALS患者が発生した。一〇〇万人当たりの年間発生率は六・七人と、湾岸戦争に従軍しなかった兵士の二倍であった。A空軍に限って言えば二・七倍だ。しかも、ALSはふつう五〇歳代以降に発症する病気であるが、この人たちの発症年齢は平均三六歳と若く、戦後一〇年以内に発症している。

兵士のALS増加は湾岸戦争時だけではなく、第一次と第二次世界大戦、それに朝鮮戦争とベトナム戦争に従軍したアメリカ軍兵士のALS発症**e** ヒンドは、一般人の一・五〜二倍であった。そして、戦闘期間が長くなるにしたがって、発症率は増えるという。第二次世界大戦では著名な軍人も後にALSに罹っている。フリードリッヒ・パウルス大將は、凄惨な市街戦が繰り広げられたスターリングラードの攻防戦でのドイツ第六軍司令官であった。一九四三年二月、最後の一兵まで闘えというヒトラーの命令に背いてソ連軍に降伏したときは、当初の三三万の将兵は九万一〇〇〇人に減っていた。**f** トウコウしたパウルスはほかの捕虜と離され、生活は優遇されたい。やがて反ヒトラーの立場をとり、ソ連国内に樹立された自由ドイツ国民委員会に参加した。戦後のニュルンベルグ軍事法廷では戦争犯罪人として訴追されることはなく、それどころかソ連側の証人として、かつての上官や同僚を**g** キュウダシした。その後は、共産圏の東ドイツのドレスデンで余生を送った。

一九五五年末、パウルスはALSに冒されてひどく消耗し、政治の舞台から姿を消した。五七年二月一日、スターリングラード降伏の日から一四年後に亡くなった。享年六六歳。なお、スターリングラードでのドイツ兵捕虜で、戦後に**h** キカンできたのは五〇〇〇人だけであったという。

アメリカの将軍もALSに罹った。マックススウェル・テイラーは、連合軍によるドイツ軍への反攻であったノルマンディ上陸作戦でのパラシュート部隊指揮官であった。ベストセラーで映画の元となったノンフィクション『史上最大の作戦』の口絵には、パラシュートで降下する直前の彼の写真が載っている。彼の属した第八二と第一〇一空挺師団は今で

も最精鋭部隊で、イラク戦争にも最初に出陣している。彼は第二次大戦後も順調に昇進し、ケネディ大統領の軍事i コモンになり、一九六二年秋のキューバ危機では統合参謀本部議長として対応に当たった。そして一九八七年四月、ペンタゴンは陸軍病院に入院していたマックスウェル・テイラー将軍がALSで亡くなったと発表した。八五歳だった。

ALSは兵士たちだけに多いのではない。Bアウシュヴィッツ収容所で生き残った人々や、ナチス・ドイツに占領されたオランダでも、戦後にALSの発症者がみられている。ソ連占領下のフィンランドでは、強制移住させられた人たちの発症率は通常の二倍であった。また、イランで人質となったアメリカ大使館員にもALS発症者がいる。筆者が診ていたある患者は、少年時代に旧満州で終戦を迎え、独りで鴨緑江を渡って朝鮮半島をさまよひ、やつと帰国したという。

アスリートたちもしばしばALSに罹っている。この病気は、アメリカではルー・ゲーリッグ病と呼ばれている。一九三〇年代、大リーグのニューヨーク・ヤンキースでベーブルースと組んだ一〇〇万ドル打線でファンを熱狂させていた名選手ルー・ゲーリッグが、現役中に発症したことによる。あまりにも衝撃的な出来事であったからだ。他にも、名のある野球選手や、プロ・バスケットボール選手、ゴルフプレーヤーなどの罹患者も報道されている。イタリアのプロ・サッカー選手は、一般の人よりALSの発症率が六・五倍高く、平均発症年齢も四三歳と、二〇年早い。アメリカンフットボール選手では四〇倍も多いという報告もある。

戦場の兵士たちは過酷で凄惨な体験などで、非常に強い心理的ストレスを受けることになる。サッカーやアメリカンフットボールなどは、激しい闘争心でもって肉体をフル活動させる激しいスポーツだ。兵士たちと同じような激しい心理的ストレスがかかっているに違いない。

かつては心の問題と身体の病気は別と考えられていた。しかし、精神的に落ち込んで鬱状態にj オチイった人は、脳の働きの変化が最終的に免疫機能を悪くし、その結果、感染症やがんなどに罹りやすくなることがわかつている。ものすごい心理的ストレスの繰り返しや持続が、脳や脊髄の中の環境を変化させ、神経細胞の正常な営みに影響を及ぼし、神経細胞の死をもたらすことがあるのかもしれない。激しい運動が同時に加わると、事態をさらに悪くするのだろうか。

統計的に湾岸戦争従軍者では多いとはいえ、ALSになった人の数は極めて少ない。c 特定の病気を発症する人とならない人との違いは、病気の原因にさらされたときの感受性に差があるに違いない。何かがあるはずで、研究が必要だ。多くの人命が失われる戦争において、兵器や軍事技術が発達するばかりではあまりにも寂しい。

マイケル・ドネリー少佐は、発語ができなくなっても特殊なコンピュータで意思を伝え、湾岸戦争症候群やALSについて世の中に訴え続けていった。人工呼吸器を装着しての闘病生活の末、二〇〇五年六月、四六歳で亡くなった。

(設問)

問一

a

 \sim

j

 のカタカナを漢字になおしなさい。楷書で丁寧書きなさい。

問二

i

 \sim

v

 に入れるのに、最もふさわしいと思われる語句を、それぞれの選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

i ア 開戦 イ 序幕 ウ 突破 エ 火蓋 オ 面子

ii ア 煙霧 イ 深淵 ウ 濁流 エ 長雨 オ 泥沼

iii ア 勘ぐられる イ 気取られる ウ ささやかれる

エ つぶやかれる オ わめかれる

iv ア さりげなく イ 素っ気なく ウ 唐突に エ 朗らかに

オ 未練がましく

v ア 青い顔 イ 重い腰 ウ 固い拳 エ 軽い尻 オ 細い首

問三 傍線部Aに「空軍に限って言えば二・七倍だ」とあるが、空軍での罹患者は、一〇〇万人あたりに換算すると、何人の計算になるか、小数点以下三桁まで答えなさい。

問四 傍線部Bにある「アウシユヴィツツ収容所」とは、どのような施設か。知っていることを簡潔に記しなさい。

問五 傍線部Cに「特定の病気を発症する人としな人」とがいてるのは、病気の原因にさらされたときの感受性に差があるに違いない」とあるが、本文でその具体的な例が一つ示されている。その文の最初の五文字をそのまま抜き出しなさい。

問六 本文で例として挙げられているALS罹患者の中で、フリードリッヒ・パウルス、マックスウエル・テイラー、ルー・ゲーリッグのうち、本文の主旨にあまりふさわしくない例はどれか。一人を選んで、その理由を簡単に説明しなさい。

問七 本文の主旨からすると、マイケル・ドネリー少佐がALSに罹った原因は何だと考えられるか、箇条書きで三つ答えなさい。

問八 マイケル・ドネリー少佐の晩年の行動について、あなたはと思うか、七五字以内で記しなさい。